

〈民意〉な国のアドルノ Adorno's Adventures in Consensusland

片上平二郎
KATAKAMI Heijiro

1. 「〈民意〉の世紀」とアドルノ

この「〈民意〉の世紀——大衆社会の政治・芸術・文化」というシンポジウムのタイトルからはきわめて意味深い印象を受ける。ここで言われる〈民意〉とはいったい何を意味するものなのか。今現在、我々が生きるこの混乱した社会情勢は、〈民意〉が反映した結果、こうなったものなのか、それとも無視されている結果、こうなったものなのか。つまり、我々は「〈民意〉の世紀」の内側にいるのか、それとも外側にいるのか。そんな様々な問いが思い浮かんでくる。

ひとまず 20 世紀という時代が「〈民意〉の世紀」であったと考えることは妥当であるだろうし、その時代精神を主導した存在として「アメリカ」という国があったということも確かであろう。〈民意〉によって動かされる“新たな”大国、そんなイメージが 20 世紀の「アメリカ」にはあった。未曾有の世界大戦の結果とその後の戦後「世界」は、そのイメージを裏打ちするものであった。冷戦が終わった後の視点で 20 世紀を振り返れば、その時代の中にあったとき以上にその感触は強いものを感じる。

21 世紀という時代もまた「〈民意〉の世紀」であると考えることができるものであるだろうし、現在の混乱する「アメリカ」も「〈民意〉の国」であると考えることができる。ポピュリズムがもたらした混乱は確かに〈民意〉に由来するものであるのだから。

ただ、やはり「〈民意〉の 20 世紀」と「〈民意〉の 21 世紀」の間には違いがあるようにも思われる。「20 世紀」は奇妙な時代であっただろうが、まだ始まったばかりの「21 世紀」も現時点においてすら、相当に奇妙な時代で

あるように感じられる。「アメリカ」を見ても、「日本」を見ても、そして世界のどこかしこを見ても、政治も社会も単にバカバカしい騒ぎに巻き込まれているように感じられるが、同時にそのバカバカしさによってもたらされた結果はひどくおそろしいものになっている。「20世紀」と「21世紀」の連続性と非連続性は〈民意〉という視点から、十分に考えられるべきものであるだろう。

このエッセイ的な論文では、しばしば「反アメリカ文化」の代表的な思想家とみなされるドイツの哲学者・社会学者・美学者テオドール・アドルノ（1903-1969）の20世紀半ばの「アメリカ経験」を再考することで、「〈民意〉の世紀」なるものへの1つの視点を提起していきたい。

ユダヤ系の出自を持つアドルノは、ナチスの勢力拡大から「アメリカ」に亡命をしている。彼は元々、クラシック音楽の作曲家を志したこともあり、また、哲学的素養も十分に兼ね備えた人物である。そのような傾向から典型的な「ヨーロッパ知識人」とされることが多いアドルノは、「アメリカ」を経験する中で、ジャズに代表される文化産業への批判¹や統計調査に代表される実証主義への批判を行っている。ここで批判される対象は彼から見た「アメリカ文化」的なものであると言えるだろう。「自分自身のことを徹底してヨーロッパ人だと考えている」[Adorno 1969: 113=1973: 27-28] アドルノにとって、「アメリカ」という場所はとても奇妙なものに感じられたのだ。彼の批判的思考には「アメリカ」体験が大きな爪痕を残している。それは〈民意〉との関係にまつわるものである。

これ以降、シュテファン・ミュラー＝ドームの『アドルノ伝』やローレンツ・イェーガー『アドルノ——政治的伝記』などに記された伝記的叙述を主に参照しながら、ある「ヨーロッパ系学者のアメリカにおける学問的経験」[Adorno 1969=1973] について考えていきたい。ただしそこから確認したいのは、ある個人の「アメリカ」経験だけでなく、「〈民意〉の世紀」初頭に起きた文化接触についてである。世界大戦やファシズムの勃興によって起きた知識人の移動によって、「アメリカ」的な科学的志向性と「ヨーロッパ」的な思弁的伝統の接触はより激しいものとなり、学術的發展が生み出された裏側では、ある種の文化的な軋轢が生じてもいたはずだ。この軋轢の経験の

もっとも激しい1例にアドルノの経験があるだろうし、そこから彼の「アメリカ文化批判」ともとれる論考が生み出されたと言える。

このような視点からアドルノの「〈民意〉な国」像を見ることは、「20世紀」という時代、そして「21世紀」という時代を考えるための補助線をつくりだすと考えている。哲学者・社会学者・美学者という横断的な視座を持つアドルノの思想は、「大衆社会の政治・芸術・文化」というこのシンポジウムの副題を貫通するものともなるはずだ。

2. 「移民の国」への「亡命」、「民意の国」への「亡命」

まず強調しておきたいのはアドルノが「亡命者」であったということである。しばしば「アメリカ」は「移民の国」として語られる。「移民」とは故郷を離れ、新たな場に生活を移し替えようとする存在である。そのように人が集まった「アメリカ」は世界の中でも“新たなる”空間として存在していた。しかし、先にも記したようにアドルノは「アメリカ」に来た後も「外国」で過ごした最初の日から最後の日に至るまで、自分自身をヨーロッパ人として考えていたし、それを否定したことは一度もなかったし、「自分の個人的生活の精神的連続性を維持することは当然のように」考えていた〔Adorno 1969: 113=1973: 28〕。そして、アメリカに来たことによって、その事実に変更されて気付かされることになったとも彼は語っている。つまり、彼は「移民の国」アメリカへ、「ヨーロッパ」性を保持したまま「亡命」している。「移民」と「亡命者」の間にある違いは意外と大きな要素であるだろう。

実際、彼は英語で文章を書くことを生活の上で仕方がないことと一部妥協しながらも、大切な文章は「ドイツ語」で書くという態度を一貫して維持しようとしていた。マーティン・ジェイはこのような姿勢が理由となり、1969年の「死亡当時まではアメリカでは、ほとんど『権威主義的パーソナリティ』の表紙の筆頭筆者としてしか知られていなかった」としている〔Jay 1986=1989: 210〕。「亡命」下でドイツ語によって書かれた『啓蒙の弁証法』で、ギリシア叙事詩の中でもオデュッセウスの苦難に満ちた帰国譚が大きな比重で分析されていることを、この視点と重ねながら考えてみることも重要であ

るだろう。彼は「アメリカ」を生きながらも、「アメリカ」に「同化」することを拒否しようとしている。

当然、「ドイツ」とて、彼にとって樂園であったわけではない。というよりも、ファシズムの力が増していく故国は何よりも彼にとって恐怖の対象であり、だからこそ、そこを離れるという選択をアドルノはしたはずだ。だがそれでも、彼の「文化」の根は「ドイツ」、もしくは「ヨーロッパ」にあり、そこから自由に羽ばたいて、アイデンティティを変化させるということは彼にはできなかった。とは言え、暴力あふれる「ドイツ」に戻ることはできない。だからこそ、「亡命者」という自己規定を行うしかなかったはずだ。

まず最初に、アドルノと「アメリカ」の関係について伝記的事実をざっと確認しておこう。ユダヤ系の出自を持つアドルノはナチスの勢力拡大に伴い1934年にイギリスに向かい、そこで哲学研究を行っていた。しかし、その後、アドルノは1938年にアメリカに亡命することになる。先にアメリカへ渡っていたホルクハイマーらの仲介により、ニューヨークでラザースフェルドたちのラジオ・リサーチ・プロジェクトに参加することになったのだ。詳しくは後に論ずることになるが、このアドルノとラジオ・リサーチ・プロジェクトの関係は徐々に陰悪なものになっていき、1941年に失敗に終わることになる。

その後、アドルノは1941年に今度はロサンジェルスへ移動する。西海岸には亡命ドイツ人たちのコミュニティが存在しており、その環境の中でドイツ語によってホルクハイマーとの共著『啓蒙の弁証法』の執筆を本格的に開始する。そして、1943年に「帰化証明書」を取得する。この頃からアドルノは反ユダヤ主義についての経験的調査にも携わっており、その成果の1つとして『権威主義的パーソナリティ』研究が発表されている。

第二次世界大戦が終結した後の1949年にアドルノはドイツに帰国する決意をする。戦後ドイツの政治的・社会的状況の不確定性や自らの職位の不安定さのためにいささかの迷いはあったようであるが、この帰国は彼の「ヨーロッパ人」としてのアイデンティティを改めて確認する契機となる。だが同時に、アメリカ市民権を保持しておくことへの魅力もあったようだ。伝記的な叙述を見る限り、「ドイツ」にいなながらも「アメリカ」との土地的關係性

を維持しておくことへの一定の色目もあったように感じられる。

アドルノの最後のアメリカ滞在は1952年に行われた10ヶ月程度の期間のものである。アメリカ市民権を保持したまま、アメリカから離れていられる期限がこの年であったのだ。彼はこの滞在時に、新聞の星占い欄の研究やテレビ番組の研究を行っている。この後にアドルノがアメリカを訪れることはなく、そのまま1955年にアドルノのアメリカ市民権は失効することになる。

以上を踏まえるとアドルノは合計12年近く「アメリカ」に滞在しているが、その大部分をニューヨークとロサンゼルスで過ごしており、それ以外の土地は移動中に軽く立ち寄った程度のものである²。このようなアドルノの「アメリカ」との間の微妙な関係を指摘しながら、クラウス・オッフエは『アメリカの省察』において、滞在期間9ヶ月のアレクシ・ド・トクヴィル、13週間のマックス・ヴェーバーといった著者たちと比較して、総体的な「アメリカ分析」を行っていないアドルノの姿勢について言及している〔Offe 2004=2009: 87〕。

彼の「アメリカ経験」は自発性を伴ったものではなく、半ば、外的な状況による強制という側面を持つものであった。それゆえに能動的に「アメリカ」を考えるとというよりも、意図せず自分が巻き込まれる状態になった社会について受動的に考えるという側面も存在していただろう。そこに「亡命者」による分析という独特の性格を見てとることも可能であるはずだ。

3. 〈民意〉と「教養」

こうした「アメリカ」との関係の中で、アドルノによる「文化産業」批判、「メディア」批判、「経験調査」批判についての諸論考が準備されることになる。これらはしばしば、古き「ヨーロッパ的教養人」による「アメリカの皮相性」嫌悪というように、アドルノの文化的「好み」の問題として解釈されやすい。ただ早急にそのような解釈図式に落とし込む前に、アドルノの「アメリカ経験」についてもう少し細かく見てみよう。

アドルノが参加することになるラジオ・リサーチ・プロジェクトは、ロックフェラー財団の資金提供によって行われた、マスメディアの社会に与える

影響を研究するための調査プロジェクトである。このプロジェクトの中で大きな役割を担ったのが、ウィーン出身の統計研究者であるポール・ラザースフェルド（1901-1976）である。彼は33年にアメリカに渡り、統計的な社会調査の発展に寄与することになる。ある意味で、「アメリカ」的な統計科学的な社会調査もまた、「亡命者」によって形作られたとも言えることは興味深い。統計調査によって、メディアの社会的影響が測られるとともに、そこから理想的なラジオ番組の編成などを構想することもこのプロジェクトの目的にあった。

このような科学主義的色彩が強い調査プロジェクトに、アドルノは詳細がわからないままに参加することになる。この時点でアドルノは、「『プロジェクト』という言葉のアメリカでの用法は、私には未知のものであった」[Adorno 1969: 114=1973: 30]とも語っている。先に記したようにラジオ・リサーチ・プロジェクトへのアドルノの参加は結局、失敗に終わることになる。だが当然のことであるが、初めからこの失敗は予想されたものではない。当初は「アメリカ」的な「科学主義」が強いメディア調査に対して、アドルノの「教養」が加わることによって、より深みを持ったラジオ番組の編成が可能になると想定もされていたし、アドルノも自身の立場から「アメリカの文化」状況に対する「啓蒙」的働きかけができると感じていた節がある。

しかし、そこでアドルノが目にしたものは、彼にとって、「市場主導」の社会の中で「マーケティング・リサーチ」の如きものになった「社会調査」の姿であった。「文化」の分析とされながらも、実際に、そこでは人々の「好き／嫌い」といった好みだとか「番組が当たった／外れた」とかそういうことばかりが調査されている[Adorno 1969: 117=1973: 34]。そこには「良い／悪い」といった「文化批評（criticism）」的判断はほぼ入ってこない。そして、それは流行に対する「批判的（critical）」な視座が形成されないということでもある。アドルノ曰く、「『文化を測定せよ』という要請を受けたとき、私が考えたのは、文化というものはまさしくそれを測定しようという精神を排斥する条件そのものではないか、ということ」[Adorno 1969: 123=1973: 41]なのである。

そこで行われている調査は、自身を「科学的」＝「客観的」と称しながら、

あくまでも人々の「主観」、すなわち〈民意〉を測定するだけのものであるとアドルノには感じられた。「実証主義」とは英語で *positivism* という語になるが、まさに“こうなっている”ということを「実証」しただけで、“これは正しい”とその状況を「肯定」するものになってしまう。人々が「好きなもの」、視聴率的に「当たったもの」がすぐさま、「正しい」ものとして肯定されてしまう状況がある。アドルノからすれば、プラグマティズムにつながるような「アメリカ」の学問的状況は〈民意〉の外側が排除されてしまうように感じられるものであった。

これは「民主主義」的な事態でもある。「文化」が、「政治」同様に「人気投票」＝〈民意〉の結果、つくられていくのであり、そこには新たな可能性があるとも言えよう。しかし、そもそも、その〈民意〉なるものも「メディア」によって生み出されたものであるのかもしれない。まさにアドルノが関わったようリサーチによって人気がある曲を調査され、ラジオがその曲を流し人気を更に上げ、それを再び計測するという循環的な在り様がそこに確認されるのだ。そこには同語反復しか存在しない。そして、裏返していえば、「民主主義」なるものもまた、このような操作的在り様の中で作り出されるものであるかもしれない。「アメリカ」の「政治」研究の中で、投票行動に関する統計的調査は大きな位置を占めるものである。〈民意〉を知ることは、「文化」においても、「政治」においても、「アメリカ」では特別な意味を持っている。

そして、その〈民意〉なるものは「数字」によってあらわされるものである。つまり「数字」によって、社会も文化も強い影響を受け形作られていく。それがアドルノによって観察された「アメリカ」という場所の姿だ。長い「歴史」や「伝統」によって形成されてきた「ヨーロッパ社会」に対して、「アメリカ」は数値化された〈民意〉によって運営されていく。アドルノはそこに〈民意〉の「自由」な可能性よりも「メディア」によって操作される危うさをはるかに多く見てとる。だからこそ、アドルノは「大衆社会」と呼ばれる社会のあり方を、「管理された世界」という別の名前で描き出そうとする。

このようなアドルノの思想は当然、ラジオ・リサーチ・プロジェクトの方向性と相矛盾するものである。ここには身も蓋もない根本的な部分での

対立がある。そもそもはラジオ・リサーチ・プロジェクトの「実証的＝positive」な方法論に対して、それとはまさに逆向きのアドルノの「批評的（critical）」、そして「批評的（critical）」な姿勢が加わることで、弁証法的な発展が望まれたが故に、アドルノはこのプロジェクトに招かれた。違う立場が協力し合い、より豊かな結果が生み出されることが理想的だ。そのような目論見から、相違を持った2つの立場は協同することとなった。

だが、結局、そのような理想的な関係はそこには生まれず、お互いの違いばかりが意識され、アドルノはこのプロジェクトから撤退することになる。〈民意〉を“善きもの”と考える立場からすれば、それを否定するアドルノの態度は傲慢なものに感じられもするのだ。「技術」は「教養」を傲慢なものと感じ、「教養」は「技術」を傲慢なものと感じる。そして、そのすれ違いはどんどんと大きなものになっていく。

アドルノの「実証主義」批判と「文化産業」批判は、このような「マーケティング・リサーチ」的な態度との遭遇と反発という点からコインの両面のような関係にある。それらはともに、「アメリカ」的な〈民意〉観への違和感というかたちで読み取ることもできるものであるだろう。

このようなアドルノの態度はたしかに「反アメリカ」的なものと呼べるものである。しかし、近年、たとえば、David Jenemannの *Adorno in America* (2007) や Ehrhard Bahr の *Weimar on the Pacific* (2008) のような、アドルノの「アメリカ」経験をより深く問う書物が英語圏で散見されるようになっている。以下ではこのような視座を借りながら、アドルノと「アメリカ」の関係について少し違う軸から考えてみよう。

4. 「アメリカ的知識人」としてのアドルノ

「反アメリカ」の思想家として語られることが多いアドルノであるが、改めて「西ドイツ」帰国後の彼の学問的方向性や種々の発言を見ると、その中にある「アメリカ」的な側面に気付くことになる。そして、「戦後ドイツ」で彼が置かれた社会的位置も「アメリカ」との関係を考慮すると見えてくる部分がある。「アメリカ」へと「亡命」せざるをえなかった知識人という点で、

彼の帰国は国民的な贖罪の意識を刺激するものであっただろうし、「アメリカ」で彼の地の学術動向を目の当たりにしてきたという意味では、“新しい”学問を輸入可能な知識人ととらえられていた部分がある。“新しい”「西ドイツ」と「アメリカ」との関係という文脈の中で、「戦後」のアドルノの活躍を見ることが可能である。

そもそも、「亡命」開始の時点からアドルノと「アメリカ」の関係を違った角度から考えてみることもできる。ローレンツ・イエーガーはアドルノの「イギリス」への順応の苦勞について述べているが、その1つとして彼の地ではジャズを語る哲学者などというものは「関心と呼ばないどころか、面白がられるだけで、理解されなかった」[Jäger 2003=2007: 144]ということを指摘している。実際のところ、当時はまだジャズを真剣に学術的に批判するような営為自体が「ヨーロッパ」では異様なものであったかもしれない。批判という形態であれ、「文化産業」的なものを正面から語ろうとするアドルノの態度は「伝統」的な学術の文脈からは外れた部分がある。その意味ではそもそもアドルノを“新しい”文化への関心を持つ思想家としてみることができるだろうし、反発や怒りという発露形態によってでも、そのアドルノの志向に対応し得た数少ない場所が「アメリカ」であったのかもしれない。

さらにいえば、ニューヨークに足を踏み入れた際のアドルノのそこへの印象は肯定的に感じられる部分も多い。アドルノはニューヨークで働ける状況をカフカになぞらえて、城に入れた喜びとして語っている [Horkheimer, Adorno 2003: 272]。単なる「反アメリカ」趣味という解釈とは異なる角度から、アドルノのアメリカ滞在時のさまざまな経験を読み直してみることも重要であろう。

その延長で「戦後ドイツ」での彼の活動についても考えてみよう。「実証主義」批判という文脈で語られることも多いアドルノであるが、「戦後」の彼の学術活動を見ていると「ドイツ」への「実証調査」の導入者の一人としてとらえることができる。たとえばフランクフルト社会研究所でつくられた『現代社会学の諸相』というハンドブックは、社会調査の意味もきちんと織り込まれた社会学のテキストとしてつくられたものである（個人的にも学生時代に、この本によって社会学における調査と理論の関係について教えられ

た書物であった)。とかく精神主義的な傾向を帯びやすい「ドイツ」の学術的風土に対して、「アメリカ」の科学主義を持ってしてそれを相対化しようとする態度は「社会学者」としてアドルノを見た際に確認できることである。

そもそもアドルノはラジオ・リサーチ・プロジェクトとの関係が失敗に終わった後に、『権威主義的パーソナリティ』研究を含む反ユダヤ主義の社会調査に携わっていた。過去の失敗を通じて学んだことやそこで本当にやりたかった調査方法などを組み合わせながら、インタビューとアンケートを織り交ぜて、この調査プロジェクトは進められ、一定の成功も収めている。その経験から得られた視座は、帰国後のアドルノの学術活動に強く反映されている。たしかに文化は測定できない。ただし、バイアスは測定可能であるのだ [Jay 1986=1989: 238]。そのような考え方にに基づき、アドルノは「批判的社会調査」とでもいうべき調査スタイルを開拓していった。実際、アンセルム・ストラウスの「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を先取りしていたという社会学的な評価も存在している [Müller-Doohm 2003=2007: 690]。

このような経緯を経て、アドルノの思想、およびフランクフルト学派の思考枠組の中で社会学の持つ位置の重要性が増したという指摘もある。元より学術横断的な風土で知られたフランクフルト学派であるが、そこでの横断性の意味が、戦前の「哲学+マルクス主義+精神分析」という構成から、戦後には「哲学+社会学」という構成へと変化していると考えられることができる。この変化には、アドルノを含む、フランクフルト学派のメンバーの「亡命」下での学術経験が強く反映されているはずだ。彼らの学問的態度や方法論は、「アメリカ化」を経由してできあがっている。

その根底にあるのは「アメリカ」経験によって触発された「啓蒙」という態度であるだろう。ファシズムを生み出した精神風土に対する危機感はユダヤ系知識人であるアドルノこそが誰よりも感じていたものであるだろうし、「戦後」においても復古主義の影は絶えず姿を見せていた。「ドイツ」もまた理想的な場所などではなかったし、現在もそうなっていない。『本来性という隠語』などのハイデガー哲学に対する辛辣な批判もその危機意識に由来するものであるだろうし、1967年の講演『新たな極右主義の諸側面』³のような潜在的なファシズム的な潮流に対する分析は数多く存在する。そのよ

うな社会的・文化的バイアスは「科学」の視点で客観的に分析されるべきであるし、「民主主義」的な感覚の拡大によって改善されるべきである。「アメリカ」に違和を感じ続けていたアドルノではあるが、それを全否定すべきでなく、〈民意〉と「科学」の意義を強調すべき局面はあると考えていた。「戦後」のアドルノは、「ドイツ」において「アメリカ」的な価値観が「啓蒙」されていくべきものであることを理解していた。たとえばアドルノは次のように述べている。

ドイツの大学内部の生活を民主化しようとする、現在進められつつある努力は、アメリカでのわたしの経験からみて馴染み深いものであり、ドイツにおける同様の民主化のために、私もまたできるかぎりの力を貸すことは、自分がアメリカで所属したある種の伝統を引き継ぐことに他ならない [Adorno 1969: 133=1973: 58]

そして、その「啓蒙」の手段としてメディアが利用されていたことも確認されるべきであるだろう。書くこととしゃべることとの間の質的な差異を強調しながらも、アドルノはラジオ、時にはテレビという手段を通じて、自身の主張を人々に伝えることを行っていた。立場の違う保守派知識人との論争などを含めて、「メディア知識人」という「戦後」のアドルノの一面は確認されておくべきものだ。これについても、ラジオ・リサーチ・プロジェクトなどを通じた「アメリカ」経験との関連を見ることができる。

ある種の「親米知識人」的な枠組みを通じて、「戦後」のアドルノの活動を評価することが可能であろう。たしかにアドルノの中心には「ヨーロッパ」愛好的で「反アメリカ」的な感覚がある。そして、その傾向は実際の「アメリカ」経験によって自覚的に強まった側面があるだろう。だが、同時に「アメリカ」経験はアドルノの内なるその傾向を相対化する役割を果たしたし、また同時に、自身だけでなく「ヨーロッパ人」もその相対化を積極的に言うべきであるという判断を生み出しもしたはずだ。

その意味では、「戦後」のアドルノの政治的な態度は、「ドイツ」的なものと「アメリカ」的なものとの間のバランスとりのような部分があるように感じられる。ある場面（それは特に「文化」や「芸術」についてであるだろう）では「ドイツ」や「ヨーロッパ」的な感覚の可能性を語り、また違う場面で

はその危うさを指摘しつつ、「アメリカ」的な精神風土の導入を主張する。1960年初頭のドイツ社会学界隈での実証主義論争においてアドルノが「反実証主義」的主張を行ったのも、「戦後社会学」の“行きすぎた”「実証主義」化に対する警戒として読み取ることができる。「戦後」に「ドイツ」を考えるとということはそのような微妙な感覚を要求するものであった⁴。

アドルノの「批判理論」は何かに対する強いアンチの姿勢が読み取られやすいものであるが、むしろ、両論併記的なバランス取りという感触の下で読み解いた方がその意味がとりやすいものであると考えている。「反アメリカ」とは異なる角度から「戦後」のアドルノを読もうとするこの節の内容もそのような視座の下で論じたものだ。1950年前後のアドルノがアメリカの市民権を保持しておきたいと考えていたという事実も、この点と関連付けて考えることができるだろう。

5. 「アメリカ経験」の反省的把握

アドルノは「アメリカ」を語る際にしばしば、adjustment、すなわち「順応」や「適応」という言葉を使用している。そして、対比的に「ヨーロッパ」文化を「自律」という要素で描こうとする。

もちろん、私は精神的個性というものが、順応と社会化という過程を通じてのみ発展しうるものであることを十分承知してはいるものの、なお私は単なる順応を超越するのが、熟成した個性に課せられた義務であると同時に、その証でもあると考えている。……。30年も昔にアメリカへ渡った亡命者にとっては事情はまだそういうわけにはゆかなかった。「順応」という言葉はなおいぜんとして不可思議なことばであったし、とりわけ迫害されてヨーロッパを流れてきた人々にとっては、不思議な響きを持った。[Adorno 1969: 113=1973: 28]

「日本」においてはしばしば「欧米文化」は一括りにして「個人主義」的な文化であると語られるし、それと対比して「日本」こそが「集団主義」的な「空気」を持つ国であるとも語られる。だがおそらくこの「個人主義」と「集団主義」の関係はそこまで単純なものではない。アドルノからすると、

「ヨーロッパ」から見た「アメリカ」こそが「順応」的な「集団主義」の国に感じられたのだ。〈民意〉が大きな力を持つということは、そこへの無意識的な「順応」が存在しているということもあるかもしれない。各文化を語る際の「個人主義」や「集団主義」という枠組みについては今一度、考え直すべき部分があるだろう。そのようなことに注意しながらも、以下では、アドルノの「順応」的な「アメリカ」という論じ方について見ていこう。

最後の「アメリカ」滞在時に、アドルノが書いた星占い研究はこの点で興味深いものだ。『ゾチオロギカ』に所収されている「二番煎じの迷信」という論考の中で、アドルノは「アメリカ」で流行の星占いが、その中で家族と技術者というカテゴリーとともに、複数形の「友人たち」との相談を推奨することが多いと分析している。「個性化が欠如しており、取り替え可能」[Horkheimer, Adorno 1962=2012: 200] な存在が参照項として重視されているのだ。要は匿名的な集団性を尊重せよ、ということだ。この分析の中にアドルノの「アメリカ」観を読み取ることは可能であるだろう。

この滞在は「アメリカ」の市民権の保持を延長するためのものでもあった。だが、その最中にアドルノは、「ドイツ」にいるホルクハイマーに向けて、「サクランボ酒はリースマンの著作集よりも、ずっと私たちの哲学のために飲むべきなのです」[Horkheimer, Adorno 2006: 152] という帰国を希望する手紙を書いている。ここに見られるのは、アドルノが「アメリカ」にいる限り、デイヴィッド・リースマンの「他者指向的人間」についての「社会学」的分析のような作業ばかりをすることになってしまうだろうという予測をしていることだ。「順応」を分析する作業に「順応」しなければならない、そのような予期はアドルノに「アメリカ」で生きるという選択肢を捨てる決心をさせることになる。確かにそのような考察も1つの社会理論としてありえるだろうが、それはアドルノの志向と一致するものではない。この後、アドルノは「アメリカ」を訪れてはいない。

この「順応」という論点の強調は、一度目の「アメリカ」滞在時に経験された様々なことに由来するものでもあるだろう。アドルノはラジオ・リサーチ・プロジェクトの中で自分の意見を述べることを否定されたが、それはプロジェクトのスポンサーの意向を強く汲んだものでもあった。そして、戦局

の変化の中で、亡命者たちも FBI の監視の対象となり、行動が制限されていたともいう⁵。「西海岸のワイマール知識人」たちは自分たちが日系人と同じような扱いを受ける可能性を恐れていたという [Müller-Doohm 2003=2007: 353]。

ディストピアを描いた作家オルダス・ハクスリーを論じた文章の中には「外国から来た知識人は、何かを達成したいと思ったり、そこで生活の大部分を過ごすような大企業の社員に受け入れてもらおうと望めば、自律的存在たる自己を抹殺しなければならないことを否応なく思い知らされた」 [Adorno 1976: 113=1996: 138] という一節もある。『啓蒙の弁証法』では芸術の根本的な態度としての「ミメシス=模倣」とともに、「擬態」としての「ミミクリー」という論点が登場するが、これもまた、アドルノにとっての亡命経験と結びつけて考えることができるだろう。

そもそもが「批判理論」という名称もまた、亡命先で「マルクス主義」という言葉が使用しづらいためにカモフラージュとして多用された符牒的な言葉という側面がある [Coser 1984=1988: 101]。そのような意味では、フランクフルト学派における学術研究の根本的な部分にも「順応」の傷跡は深く刻み込まれている。実際、ホルクハイマーは初めて「アメリカ」を訪れようとするアドルノに宛て次のような手紙を書いている。

「できるだけ実証主義学問の調子で話すようにお願いします。政治的解釈を許すようなことは一言も言わないでください。たとえば唯物論的といった表現は絶対避けてください。……また、できるだけ単純な表現でしゃべるようにつとめてください。複雑な話はそれだけで疑惑を引き起こします。逆にできるだけたくさん資料を見せるようにしてください。それがどんな場合でも一番いいのです」 [Horkheimer, Adorno 2003: 513]

現在、標準化を指向する学術世界の中で我々が若き日に受けるアドバイスにも似て感じられるところがあるが、亡命知識人たちが「順応」の必要性を非常に強く感じていたことはここにもうかがうことができる。アドルノが「アメリカ」という場所を反省的に捉えようとしたときに「順応」や「適応」という要素がまず現れることはこのような側面から考えることもできるだろう。

6. 順応の微笑みの国

ただし、そこでアドルノは「順応」を否定的に捉えてしまう傾向を「ヨーロッパ人」の性格という面からもう一度考え直そうとする。「ヨーロッパ人は、ともすれば『順応』ということばを単なる否定的なことばとして、つまり個人の自発性と自律性の消滅として考える傾向がある」[Adorno 1969: 146=1973: 72] のだ。「アメリカ」の皮相性への蔑視がそこにはある。アドルノは自分にも内在するこのようなバイアスのかかった捉え方を指摘しつつ、「アメリカ」における「中産階級文明の全面的発達」[Adorno 1969: 146=1973: 73] という流れの中には「民主主義的諸形式の実質的内容」[Adorno 1969: 145=1973: 71] を作り出す可能性について話を広げていく。「順応」は〈民意〉を生み、〈民意〉は実質的な「民主主義」を生み出しうる。「順応」と「民主主義」の相性は悪くはない。

このような肯定的な「アメリカ」の捉え返しという作業は、アドルノが「アメリカ」を訪れることを辞めた後に多く見られるようになってくる。距離化されたことによって、「アメリカ」の経験はこれまでとはさらに違ったかたちで考えることができるようになったことが、このような「アメリカ」経験の新たな角度からの再考察のきっかけになったのであろう。「アメリカ」経験の昇華とも言えるかもしれない。

たとえば、アドルノは「アメリカで、古いヨーロッパでは滅多にお目にかかれない真の人間性なるものの潜在的基盤を知ることになった」[Adorno 1969: 145=1973: 71] と語っている。「本来のアメリカ人というのは、ヨーロッパ系移民と比較すると、より開かれた心を持っており、とりわけ他者に援助の手をさしのべようとする気持ちが強かった」[Adorno 1969: 126=1973: 46] のである。実際、アドルノは献血の習慣などさまざまな場所に見られる「アメリカ人」の優しさを称賛している。そして、その優しさはラジオ・リサーチ・プロジェクトにおける秘書や助手たちの姿の中に見ることもできるものであった [Adorno 1969: 123-124=1973: 42]。同僚からは否定される発言内容にも、彼らは理解を示してくれていたとアドルノは述べている。

興味深いのは、アドルノがこの「アメリカ人」の寛大さを語る際、同時に

自らの失敗に由来する過剰防衛を語っていることだ。「火傷をした子供が火を見て恐れるように、当時私は警戒心を過度に強めており、自分の考えを述べるにしても……勇気をほとんど失ってしまっていた」[Adorno 1969: 126-127=1973: 46-47]。この発言はすでに「アメリカ」から遠く離れた時期に語られたものであるが、だからこそ、当時、気付いていなかった「アメリカ」の優しさが再発見されるかのように語られている。これは「順応」への圧力の中で、過剰に身構えてしまっていた過去の自分の再発見でもある。「亡命者」はつい過剰にふるまってしまう。

そして、この「順応」や「適応」への過剰な反応は、自らの対立者であったラザースフェルドのような科学主義者にも観察されるものである。「ヨーロッパ移民というのは、偏見と競合という圧力の下で、しばしばアメリカ人以上にアメリカ的であろうとする傾向があり、同じヨーロッパ系の新参者に対しては、すべての人間を性急に自分たち自身の『適応』を脅かす一種の脅威とみなすという傾向を示していた」[Adorno 1969: 126=1973: 46]とアドルノは分析する。すなわち「アメリカ」の「科学主義」という側面だけに飛びつき、それ以外のものを否定する過剰に「適応」的な態度も「亡命者」特有の過剰反応の1つのあらわれである。

反発というかたちをとるにせよ、適応というかたちをとるにせよ、「亡命者」と「順応」の関係は過剰なかたちであられる。それは「順応」という「アメリカ」的な性格の発現形態の1つではあるが、どこかでその姿を変えたものになってしまっている。そこでアドルノは「亡命者」に現れるのとは違った、「アメリカ」それ自体の「順応」のあり方を取り出そうとしていく。

1958年にアドルノは「ドイツ文化 (Kultur) とアメリカ文化 (Culture)」というタイトルの講演を行っている。その中でアドルノは「アメリカ人」の「笑顔を絶やさない (keep smiling)」態度についての考察を行っている。この「笑顔」は「お決まりの笑顔 (obligat Lächeln)」という言い換えが成されるように、「その人特有の笑顔などではなく、上司に促されたものであり、さらにチャームスクールで習った」ようなものである。その意味ではまさに「順応」や「適応」の圧力の中で人工的に仕立て上げられたものである [Adorno 2003: 66]。この「笑い」は自然なものではない。

「亡命」中に執筆された『啓蒙の弁証法』の「文化産業」に関する章の中では、ディズニー映画などに見られる人工的な「アメリカ」の「笑い」はサディズム的な暴力と結びつけられて語られていた。観客たちはドナルドダックがひどい目に遭うシーンを笑う。だが、ここで笑われているのは、社会に操作され気付かぬ内にひどい目に遭っている自分たちなのだ。このようにして、「笑い」、「笑われる」ことで、人々は社会の中で馴化されていく。「笑い」とは「文化産業」による管理の武器であるのだ。この講演での「笑顔」論もその延長で書かれたものと推測されるかもしれない。だが、それから15年ほどの間にアドルノの「アメリカ」の「笑い」に対する評価はまったく異なったものになっている。

続けて、アドルノはこの「お決まりの笑顔」についての「ショッキングな分析」を行う。そこでは、「アイデンティティを保つべく」、他者を無視するが如き「悪意ある不機嫌な表情をする人たち」より「外的な強制によって親しみに導かれた人の方が、他者との関係においてある種のヒューマニズムに至りやすいのではないか」[Adorno 2003: 66] という問いが提起されている。「自律」のナルシシズムは他者性を無視することになるが、「順応」的な笑いは人を“優しく”する。現に「アメリカ人」は寛大で優しいのだ。人工的な「笑顔」が広がることで、人は“優しくなる”。そのようにして「アメリカ」の〈民意〉はできあがっている。ここに「アメリカ」の寛大なる「民主主義」の秘密がある。現に「戦後」の世界はどんどんと「アメリカ化」しているのである。

この展開の中には「順応の笑顔」や「アメリカ」の〈民意〉に対するきわめて屈折したアドルノの態度が現れていることだろう。やはりどこかアイロニカルな響きがこの講演の発言の中には感じられる。ただ、アドルノはこの語り口を単なる皮肉や悪口ととるのではなく、それらが生んだ平和さの意味を正面から考えなければならないとしている。このようなアドルノの考え方は、「アメリカ」や〈民意〉なるものの複雑さを考えるための1つの（屈折した）視座となるものでもある。

人工的な風景の中での人工的なヒューマニズム、それは「歴史性」という差異を抹消していくものであるが、同時に「順応」的な平和を生み出す可能

性をもつ。「戦後」の世界はいまだに全体主義的な支配形態の方へとひっくり返される危険性を持ち続けている。それはアメリカにも潜在するものである。「けれども、アメリカにおけるファシズム的な潮流に対する抵抗力は、おそらくヨーロッパのいかなる国におけるよりもはるかに強力だといってよい」[Adorno 1969: 145-146=1973: 72]。これが「アメリカ」に下したアドルノの評価である。その秘密は〈民意〉という単純にして奇妙なものの中にある。

アドルノの「アメリカ」に対する語り口は幾重もの屈折と屈託に満ちている。それゆえに、単純に肯定とも否定ともいきれない複雑な要素に溢れている。当然、アドルノの描いた「アメリカ」はあくまでもアメリカというものの中の1側面を描き出すものに過ぎない。だからこそ、本論文では基本的に「」を付けた「アメリカ」という表記をくり返してきた。だが、ある「亡命者」が経験した「アメリカ」という場所から綴られる「アメリカ」論は、「〈民意〉の世紀」を捉えるための1つの補助線となるはずだ。

現在、我々が生きる世界には、おそらくアドルノが見てきたものとはまた姿の違う「順応」や「笑い」の回路が存在している。我々もまた「〈民意〉の世紀」を生きている。アドルノが「アメリカ」を捉えようとする中で「順応」という分析の軸線が生み出された。しかし、その軸線はまっすぐ何かを射貫くというよりも、彼の人生の経験を反映しながら、複雑に揺れていくものでもあった。現在の複雑な〈民意〉の世界を捉えていくためには、一貫した分析軸を用意するよりも、アドルノの分析の揺れた振れ幅を追っていく作業の方が手がかりとして有効なものかもしれない。

註

¹ ただし、アメリカ亡命以前からすでにアドルノはジャズ批判を行っている。

² アドルノについては休暇中のバカンス以外には、未知の土地への旅行などはしない「旅嫌い」な側面が指摘されてなどもいる [Jay 1986=1989: 267]。このことは、アジア地域などへの関心の無さという論点とも結びつくものであるだろう。

³ この講演はアドルノ没後50周年に当たる2019年にドイツで単独の書物として刊行され大きな反響を呼んだ。

- 4 当然、このことは「戦後日本」について考察する際にも同様であるはずだ。
- 5 イェネマンは「メディア」論的な要素を多くアドルノの「アメリカ」経験の中に読み込んでいくが、FBIの監視が電信によって行われたものであることを強調している。

参考文献

- Adorno, T. W. 1964. *Jargon der Eigentlichkeit: Zur deutschen Ideologie*. Suhrkamp. (=1992. 『本来性という隠語——ドイツ的なイデオロギーについて』 笠原賢介訳, 未来社.)
- . 1969. *Stichworte: kritische Modelle 2*, Suhrkamp. (=1973 「アメリカにおけるヨーロッパ系学者の学問的経験」 山口節郎訳 『亡命の現代史 4 社会学者・心理学者』 25-76 頁, みすず書房.)
- . 1976. *Prismen: Kulturkritik und Gesellschaft*. Suhrkamp. (=1996 『プリズメン——文化批判と社会』 渡辺祐邦・三原弟平訳, 筑摩書房.)
- . 1979. *Soziologische Schriften I*. Suhrkamp. (=1992 『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』 城塚登・浜井修・遠藤克彦訳, 河出書房新社.)
- . 2003. "Kultur und Culture." Wiederabdruck in *Bahamas* Nr. 43 (04. 2003), S. 63 ff.
- . 2019. *Aspekte des neuen Rechtsradikalismus*. Suhrkamp. (=2020 『新たな極右主義の諸側面』 橋本紘樹訳, 堀之内出版.)
- Adorno, T. W., E. Frenkel-Brunswik, D. J. Levinson, and R. N. Sanford. 1950. *The Authoritarian Personality*. Harper & Brothers. (=1980 『権威主義的パーソナリティ』 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳, 青木書店.)
- Bahl, E. 2008. *Weimar on the Pacific: German Exile Culture in Los Angeles and the Crisis of Modernism*. University of California Press.
- Coser, L. A. 1984. *Refugee Scholars in America: Their Impact and Their Experiences*. Yale University Press. (=1988 『亡命知識人とアメリカ——その影響とその経験』 荒川幾男訳, 岩波書店.)
- Horkheimer, M. and T. W. Adorno. 1962. *Sociologica II*. Europäische Verlagsanstalt. (=2012 『ゾチオロギカ』 三光長治・市村仁・藤野寛訳, 平凡社.)
- . 1988. *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Fischer Taschenbuch Verlag. (=2007 『啓蒙の弁証法——哲学的断想』 徳永恂訳, 岩波書店.)
- . 2003. *Briefwechsel Band I 1927-1937*. Suhrkamp.
- . 2006. *Briefwechsel Band IV 1950-1969*. Suhrkamp.
- Hughes, H. S. 1975. *The Sea Change: The Migration of Social Thought, 1930-1965*. Harper and Row. (=1978 『大変貌——社会思想の大移動 1930-1965』 荒川幾男・生松敬三訳, みすず書房.)
- Institut für Sozialforschung. 2013. *Soziologische Exkurse: Nach Vorträgen und Diskussionen*. CEP Europäische Verlagsanstalt. (=1983 『現代社会学の諸相——社会学理論への補遺』 山本鎮雄訳, 恒星社厚生閣.)
- Jäger, L. 2003. *Adorno Eine politische Biographie*. Deutsche Verlags-Anstalt. (=2007 『アドルノ——政治的伝記』 大貫敦子・三島憲一訳, 岩波書店.)

- Jay, M. 1973. *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950*. Little, Brown and Company. (=1975 『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』 荒川幾男訳, みすず書房.)
- . 1986. *Permanent Exiles: Essays on the Intellectual Migration from Germany to America*. Columbia University Press. (=1989 『永遠の亡命者たち——知識人の移住と思想の運命』 今村仁司他訳, 新曜社.)
- Jenemann, D. 2007. *Adorno in America*. University of Minnesota Press.
- Lazarsfeld, P. F. 1969. "An Episode in the History of Social Research: A Memoir." In *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960*, edited by D. Fleming and B. Bailyn, 270-337. Harvard University Press. (=1973 「社会調査におけるひとつのエピソード——メモワール」 今防人訳 『亡命の現代史4』 183-287 頁, みすず書房.)
- Müller-Doohm, S. 2003. *Adorno: eine Biographie*. Suhrkamp. (=2007 『アドルノ伝』 徳永恂監訳, 作品社.)
- Offe, C. 2004. *Selbstbetrachtung aus der Ferne. Tocqueville, Weber und Adorno in den Vereinigten Staaten*. Suhrkamp. (=2009 『アメリカの省察——トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』 野口雅弘訳, 法政大学出版局.)